



# お薦めの1冊

No.25-1

出版社:集英社新書

京都大学・同志社大学教授を歴任 京都女子大学客員教授 橘木俊詔著

## 「地元チーム」がある幸福～ スポーツと地方分権

林 但

全国スポーツ推進委員連合機関誌でも 5 月号で、特集で「スポーツ権とスポーツ格差を考える」がありました、そのことを考えていた時に目に留まったのが今回の本でした。

かつて「地元のプロスポーツチームがある」のは大都市圏に限られていました。ところが現在では、全国ほぼすべての都道府県に「地元を本拠地とするプロスポーツチーム」(野球・サッカー・バスケット・バレー・アイスホッケーなど)が存在します。この画期的な状況は何を物語るのか。格差研究など、経済データの分析の第一人者が、多方面から分析されており一気に読み込んでいきました。

この本が主張はプロスポーツを振興することがその地域の活性化に大いに貢献するというものであるが、日本でのプロスポーツを論じる時には重要な視点がある。プロ野球のように、企業が球団のオーナーになり、球団は親企業の子会社として経営に当たる方式。もう一つが、サッカーやバスケットボールに代表される、親企業は存在せず、スポーツ会社を独自に作って経営に当たる方式である。前者は企業名がチームの名称に冠されるが、後者は地域名がチーム名に冠される。

筆者は地方分散化政策の要点として、

- 1) 東京一極集中はやめ、地方の中核都市にある程度政治・経済の集中を図り集積のメリットを高める。
- 2) 企業の本社工場の地方移転。中央官庁の移転も同様。
- 3) 学校、住宅、医療、その他施設などの充実
- 4) 地方でスポーツの活発化、地方に人口が増加すれば、文化やスポーツに限らず活性化する。

現在でも日本の場合、プロスポーツ選手で年俸が高いのが野球選手である、しかしそれでも、35 歳～40 歳くらいまでがせいぜいで指導者になれる人も一握り、地元企業のスポンサーを中心に選手生活を終えた人の雇用に考えるべきだといわれている。4 月の横須賀市議員団との“スポーツの街”意見交換会の時に講師も同様なことを言われていた。横須賀発の考え方・メソッド・事業などないものだろうか？ 自然・歴史・文化・観光等日本のほかの地域にはないものが横須賀にはある。

今横須賀にはプロチームの練習場はプロ野球・サッカーの 2 競技についてあるが、チームはない。チームを作る、〇〇競技の中心的な街としてなれるように、いろいろな関係者が協議して取り組んでいくことが重要だと考える。マリノスや Dena ベースターズの関連イベントに協力できるスポーツ推進委員の活用は検討できないものだろうか？

スポーツ推進委員の立場に立ってこの考え方をみなさまとの議論などを経ながら地域のためにできることを試行錯誤などしながら模索していきたいと、本書を読んで感じました。どうぞよろしくお願い致します。

以上